

設立趣意書

津久見の海と山といのちを守る母の会

一. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故（大量の放射能流出）を受け、私たちは脱原発の声を上げながら何も出来なかった無力さを痛感しました。原発を止めることができなかったことを自分達の責任でもあることと引き寄せ、政府が発した津波による大量の廃棄物（震災がれき）の広域処理要請を引き受けることを肯定していました。しかし、2012年4月大分県知事の要請を受け、津久見市長が広域処理引き受けに名乗りを上げた事により、廃棄物（震災がれき）の広域処理（焼却処分）について学び真剣に考えるきっかけになりました。

果たして、「安全ながれきを処理するから心配はない」「困っている人々に手を差し伸べることこそが人の道である」「絆を大切にしよう」というだけで本当に事を進めても大丈夫なのか？不確かな不安と疑問が徐々に大きくなりました。阪神淡路大震災のときのがれきと大きく違う点は放射能汚染の問題です。

私たちはまず、本当はどうなのかという疑問を持ちながら、グリーンコープ生協おおいたが主催する「震災がれき学習会」に参加し、講師である青木さんから国民には知らされていなかった情報を得ることができました。「放射能は拡散すべきではない」「広域処理は真の被災地支援にはならない」と理解した有志が集まり、自分達が今しなければいけない事、したい事を話し合いました。そしてまずは、より多くの津久見市民に「震災がれきの事」「広域処理の事」を知ってもらうことが大切である事を共通認識し、その実現に向け有志十数人で「津久見の海と山といのちを守る母の会」という名称の団体を立ち上げました。

二. 名称について

名称を考える際にまず津久見の大切な財産である海と山はもちろんですが、突き詰めると様々な生命(いのち)が一番大事だという事を確認しました。人だけでなく、生命ある全ての生き物が含まれています。

そして、母ということばについて意見交換しました。有志の多数が女性であったことも要因のひとつですが、女性イコール母親というのではなく、生み出すもの、創り出すものとして母という言葉を使用しようと考えました。海のごとく深く、山のごとく大きく、人々をこの世に送り出し、次の世代へと育くみ、世代をつなぎ手渡していく母の存在はなくてはならぬものです。しかし、「母」ということばの意味を単なる女性と考えてほしくはないのです。男性でも女性でも次の世代へつないでいくために自分達にできることをみんなで考えていきたいと思えます。

三. 設立の理念

いろんな立場の人がいます。その立ち位置によって考え方も違って当たり前のことです。その事を認識したうえで、人の考えを否定したり自分の考えを押し付けるのではなく、情報を提供し、各自で獲得・判断していただくという方向性を目指しています。

しかし立場は違っても、考えの礎にあるのは「どのような事柄に対しても、いのちの側から考える」ということです。「いのち」そのものが尊いのです。そのいのちを守り、つないでいくための運動をしていきたいと考えます。そして更にいうなら、アメリカ先住民が物事を決定する時に「7代先の子孫にとって良いことかどうか」を判断基準にするように、子どもたちの未来にとってどうすることが最良なのかを決定の基にするのが、この会に参加するすべての人の共通理念です。